

静岡文化芸術大学 図書館・情報センターだより

新知故温

Shizuoka University of Art and Culture Library News

2024.12 Vol.45

令和6年12月発行

発行所 静岡文化芸術大学 図書館・情報センター
〒430-8533 浜松市中央区中央二丁目1番1号
TEL(053)457-6124 FAX(053)457-6125
<https://www.suac.ac.jp/library/>

Contents

■表紙

むかし渡更紗 ————— ①

■図書館散歩

劇場が奏でる
人間のドラマ ————— ②

芸術文化学科 教授
永井 聡子

自由と自在、
字数、地震、ほか ————— ③

デザイン学科 准教授
松江 幸子

■特集

わたしの1冊 ————— ④
～おすすめの本を紹介します～

■図書館ニュース

本学学生が制作した
「図書館マップ」のご紹介 — ⑤

むかし渡更紗 (帙)



むかし渡更紗 (題箋)



むかし渡更紗 (中巻1ページ)

むかし渡更紗 [上][中][下] 山鹿清華編輯
本田金之助, 芸艸堂(發賣), 1917

貴重書庫 [753.8/Y 21]

「更紗」は、近世初頭の頃に日本に伝来した、外国の模様染め布の総称です。主として木綿や絹に手描き、あるいは型を用いて人物、鳥獣、花卉などの模様を染めました。「むかし渡」は、古来外国から渡ってきた品物のことです。今回ご紹介する図書『むかし渡更紗』は、大正6年(1917年)に刊行された、木版の更紗図集です。

「更紗」の語は、今日日本だけで用いられている染色用語です。その語源には諸説があり、当時インド西海岸の要港であったスーラトSuratが転訛したもの、ジャワ語のSrasah、ポルトガル語のSarásá, Saraçaなどからきたもの、インドで極上の多彩な木綿布をさした語のSarassoによるものなどが挙げられています。

書名の『むかし渡更紗』とは、室町末期から江戸時代にかけて南蛮から日本にもたらされたといわれる更紗、またはその模造品のことで、「古代更紗」「古渡更紗」「上代更紗」などとも呼ばれます。本書は上中下の3冊本で構成され、インド更紗を主体に、中国更紗、オランダ更紗の古代更紗類を掲載しています。1ページに1枚または数枚の小布が紹介されていて、3冊で全70ページ、掲載図は計200点に及びます。

下巻の巻末にある跋文には「余積年之を聚集し」とあり、掲載されている更紗は、本書を編纂した山鹿清華によるコレクションであることが分かります。山鹿清華(本名 健吉)[1885-1981]は、大正から昭和の時代に活躍した染織家で、京都市に生まれました。1925年のパリ万国装飾美術工芸博覧会で、手織錦「孔雀」がグランプリを受賞し、以後数多くの優作を発表しました。彼は然糸や染など、広く内外の染織技法の研究を続けて独自の手織錦を考案し、染織美術の草分け的存在でした。関西図案会・新工芸院・京都図案家協会などの創立に尽くし、1969年に文化功労者に選ばれ、1974年には勲二等瑞宝章を受章しています。

参考文献:

杉林古香, 山鹿清華, 澤田宗山[ほか]編著『更紗模様』(近代図案コレクション) 芸艸堂, 2005

板倉寿郎[ほか]監修『原色染織大辞典』淡交社, 1977

中江克己企画編集『更紗: 異国情緒を染めた布』(日本の染織:5) 泰流社, 1975

小笠原小枝監修『更紗』(別冊太陽) 平凡社, 2005

『更紗』, 日本大百科全書(ニッポニカ), JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, (参照 2024年11月18日)『山鹿清華 日本美術年鑑所載物故者記事』, 東京文化財研究所, <https://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/9824.html> (参照 2024年11月18日)



芸術文化学科 教授
永井 聡子
Nagai Satoko

紹介した図書

小山内薫著
『芝居入門』
770.4/O 74

村野藤吾著、神子久忠編
『村野藤吾著作集』
520.4/Mu 53

服部幸雄著
『大いなる小屋：
江戸歌舞伎の祝祭空間』
(平凡社ライブラリー)
774.5/H 44

高山宏著
『目の中の劇場』
(アリス釣り、2)
774.5/H 44

清水裕之著
『劇場の構図』
(SD選書)
771/Sh 49

赤井紀美・熊谷知子編著
『築地小劇場100年
—新劇の20世紀—』
771/A 29

永井聡子著
『劇場の近代化：
帝国劇場・築地小劇場・東京宝塚劇場』
771/N 14

永井聡子著
『新・舞台芸術史：
劇場芸術の境界線から読み解く』
772/N 14

伊藤薫著
『舞臺装置の研究』
771.5/I 89

朝倉摂著
『朝倉摂 舞台空間のすべて』
771.5/A 85

三島由紀夫著
『天人五衰』
(新潮文庫、豊饒の海、第4巻)
913.6/Mi 53/4

ピーター・ブルック著、
高橋康也、喜志哲雄訳
『なにもない空間』
(晶文選書)
770.4/B 76

劇場が奏でる人間のドラマ

学生時代は演劇史、劇場史の読み解きと舞台作品を創ることに興味があり、初めて古本屋で出会った小山内薫『芝居入門』プラトン社（1924年）は大いに魅力を感じた。演劇人らしく、演劇論と劇場空間論の境界領域に言及しており、添えられた劇場図から舞台芸術の創造性にヒントを得た。劇場の空間性については、日生劇場など独自の世界観を構築した村野藤吾『村野藤吾著作集』鹿島出版会（2008年）が「人の心に届く」思索の体系として建築史上外せない。服部幸雄『大いなる小屋』平凡社（1994年）、高山宏『目の中の劇場』青土社（1985年）が学生時代の劇場研究欲に火をつけた。海外の劇場を訪れる過程では、清水裕之『劇場の構図』鹿島出版会（1985年）に刺激を受け、大学院の博士課程は名古屋大学教授だった清水裕之先生の研究室の扉をたたいた。

教員となって本学で開催された日本音楽学会では帝国劇場をテーマに扱うパネル企画のコメントーターとして登壇する機会があった。演劇史、劇場史の研究を行ってきた者に音楽学会からのオファーは、まるで違う世界のように見えながら「劇場」というキーワードは様々な視点から追求できる文化・芸術の拠点だということがわかる。私のテーマは「劇場の近代化と初代帝国劇場の改革」、近日発刊予定の拙稿「劇場の近代化と築地小劇場」（共著『築地小劇場100年—新劇の20世紀』早稲田大学坪内博士記念演劇博物館発行(2024年)より）とやはり近代に大きく動いた我が国の劇場改革は多方面から追求することのできる分野なのである。「劇場」を「人材」「空間」「作品」「観客」が融合する概念（拙著『劇場の近代化—帝国劇場・築地小劇場・東京宝塚劇場—』思文閣出版（2014年）、『新・舞台芸術史—劇場芸術の境界線から読み解く—』現代図書（2024年）に詳述）と捉えると、「劇場は建築」であるという一般的なイメージを超えた風景が見えてくる。「劇場」は上演する演劇や舞踊、音楽などのジャンルによってあらかじめ調合されるのであり、それをめぐる議論が劇場の在り方に大きく影響して劇場史を紡いできた。

明治期前期の新富座や歌舞伎座などの芝居小屋に、プロセニウムアーチ(額縁)などの欧風化の萌芽や、明治44年皇居前に我が国初の欧風大劇場として横河民輔(1864-1945)設計の帝国劇場(約 1800 席)が開場したことにより劇場改革が始まった歴史が、劇場研究への追求心をさらに進めた。初代帝国劇場の構想には計画と実施の図面との違いがあるのがわかっているが、実際に花道とオーケストラピットが演目に合わせて設置した嚆矢で、電動の廻り舞台や防火幕、背景画室、大道具製品所、幕内に洋楽部や背景部、電機部を揃えるなど、民間劇場の改革は舞台美術や舞台機構を刷新して演出の質を一步前進させた。帝劇の付属技芸学校では森律子らのいわゆる「帝劇女優」を育成、歌劇部も配置して様々なジャンルの上演を開始させ、総合芸術として新たな作品を創造する環境を整えていった。その背景には、支配人の山本久三郎だけでなく、森律子らの女優陣、舞台技術を担当した秀文逸など、海外の劇場を視察、デザインや技術などを日本の文化に合うアレンジをして、新しい劇場環境をつくったことがわかるのである。サービス部門に力を注いだのも慧眼で、新たな客層も育てた。

劇場改革の流れから世界で活躍する舞台美術家たちも生む。伊藤薫はその先駆けであり、築地小劇場にて舞台美術界を牽引、現在も舞台美術家の最高峰に与えられる賞として名を残す。伊藤の『舞台装置の研究』小山書店（1941年）は舞台芸術の本質を突いている。私が本学の開学10周年の記念舞台を企画・プロデュースした際に参加して下さった舞台美術家・朝倉摂さんは日本画の出身ながら、演劇界でのほとんどの作品の舞台美術を手掛け、「朝倉さんがいる限り仕事が回ってこない」と言われたほどである。そんな舞台美術家たちが口を揃えるのは、どんな劇場で作品を創るかである。朝倉摂『舞台空間のすべて』Parco出版（1986年）の「劇場の問題」では、歌舞伎劇場やギリシャ劇場、ミラノスカラ座を例に劇場論を語っている。

舞台を観る目は新たな風景に遭遇することで人を豊かにさせる。2017年に私が三島由紀夫の『天人五衰』新潮社（1977年）を舞台化（会場・静岡市清水文化会館マリナート）した際も、主演俳優の白石加代子さんを唸らせた美しくも緻密な三島文体をどう舞台上の虚構風景として観客に見せるかと幾度も実りある議論を重ねたことを思い出す。舞台空間に造詣の深い三島ならではの作品だった。静岡は三保の松原をゆかりとし、人生の豊饒を輪廻転生をキーワードにした長編小説である。演劇と劇場研究に資した極め付けは、ピーター・ブルック『なにもない空間』晶文社（1971年）で、演劇界や劇場界に衝撃を与えた。我が国は文化政策下にある国公立の文化施設の歩みというよりは、民間の劇場の歴史とクロスした劇場史であったことがよくわかるのであり、様々な角度から人間のドラマを読み解くことができるのである。



デザイン学科 准教授

松江 幸子

Matsue Sachiko

紹介した図書

森博嗣著
『自由をつくる 自在に生きる』
(集英社新書)
914.6/Mo 45

森博嗣著
『六人の超音波科学者』
(講談社文庫)
913.6/Mo 45

京極夏彦著
『破曉 (書楼弔堂)』
913.6/Ky 3

村上春樹著
『神の子どもたちはみな踊る』
913.6/Mu 431

村上春樹著
『アンダーグラウンド』
916/Mu 43

サイモン・シン著、青木薫訳
『フェルマーの最終定理』
(新潮文庫)
412.2/Si 8

コナン・ドイル著、延原謙訳
『シャーロック・ホームズの冒険』
(新潮文庫)
933.7/D 89

佐々木健一著
『美学への招待』(増補版)
(中公新書)
081/C 64/1741

自由と自在、字数、地震、ほか

自分と違う考えや知らなかった事、全く別の世界に触れさせてくれる本は宝の山だ。書かれた作品だけでなく、それを生み出した作者への興味も尽きない。脳内の書棚は記憶が不鮮明になってしまったものも多いが、特に頭に浮かんだ8冊を取り出してご紹介する。

■『自由をつくる 自在に生きる』森博嗣

「自由とは、自分の思いどおりになること」。著者は一見あたりまえのことを言っているようだが、本書における「自由」とは「自分の好き勝手に、気ままに振る舞うこと」ではない。

知識というのは道具のようなもので、たとえば、金槌と釘を手に入れば、それだけで大工さんと同じ能力を持つかというそうではない。(中略) だからこそ、講義を受けるだけでは不足で、実践的な訓練を積むわけである。(中略) 結局、自由を手に入れるということは、そういう「できる自分」を作り上げることであり、自分の変化を積極的に推し進めること、といえると思う。

技術や技能だけでなく、思考や創作についても同じことが言えるだろう。「思いどおり自在に創作する」「自在に思考し実践する」には学んだことを身につけ腕を上げることが必要で、そうして自由な活動ができる。まさにデザインのためにあるような書籍だ。

■『六人の超音波科学者』森博嗣

■『書楼弔堂 破曉』京極夏彦

『自由をつくる〜』に先立って遭遇した、既に人気作家であった森博嗣の『六人の超音波科学者』は、カラフルな表紙が目にとまり予備知識なく手にとった小説。『すべてが怪になる』が有名だが、シリーズの途中作品に唐突に放り込まれたのがかえって良かったのか、そのまま作家買いに突入することに。

同時期から追っている京極夏彦の最新シリーズ『書楼弔堂』は、古い書物を扱う書舗の物語。時代背景や建築物の描写、客である文豪たちの顔ぶれ、隅々まで文学の薫りに満ちていて濃厚である。片や多作で知られ、片や一冊が分厚いことで知られる二人には、膨大な字数を叩き込んでもらった。

■『神の子どもたちはみな踊る』村上春樹

■『アンダーグラウンド』村上春樹

この夏公開されたピエール・フォルデス監督のアニメ映画「めくらやなぎと眠る女」は、村上春樹の複数の短編を組み合わせたストーリー。重要なキャラクターである蛙が活躍する「かえるくん、東京を救う」を収録した短編集『神の子どもたちはみな踊る』は、全作品が1995年の阪神・淡路大震災に何らかの形で関わっており、アニメ映画は2011年、東日本大震災直後の東京で始まる。

『アンダーグラウンド』は、阪神・淡路大震災の2ヶ月後発生した地下鉄サリン事件関係者62人へのインタビュー集。理不尽な災害やテロを題材に、日常にファンタジーが入り混じる物語とノンフィクション、どちらも心に迫る。

■『フェルマーの最終定理』サイモン・シン

17世紀の数学者が遺した超難問、「フェルマーの最終定理」の解明に力を尽くした研究者たちのノンフィクション。300年以上にわたる数々の挑戦ののち、1993年、アンドリュー・ワイルズが証明を成し遂げるも致命的な誤りが見つかってしまう。約1年をかけ修正し1995年に決着がつくのだが、ワイルズの苦難に思わず涙、、。まさか数学がテーマの書籍に泣かされるとは想像もせず、記憶に残り続けている。

■『シャーロック・ホームズの冒険』コナン・ドイル

シャーロック・ホームズの有名な台詞、「君はただ眼で見るだけで、観察ということをしていない。(延原謙訳)」は、多くのデザイナーが心に留めているのではないだろうか。ホームズが友人のワトソンに対し発する言葉はいっそ清々しいほどに手厳しく、自分自身への戒めに思いつく台詞としてもちょうど良い。ドラマや映画で人気のキャラクターだが、特に短編作品はスピード感のある展開が痛快。ぜひ原作にも触れてほしい。

■『美学への招待』佐々木健一

人生初の本格的な登山で訪れた北アルプスの燕岳で、山頂近くの高い地点から見渡す山々と、強い風に変化し続ける雲を飽きず眺めながら、なぜか「格好いい景色だな」と感じたことがあった。たしかに絶景だが自然に向かって「格好いい」とは我ながらどういう感覚なのか、そもそも人間が介在していないからそう感じるのかと、そんな話を友人にしたところ薦められたのが本書。

日本語という都合のいい言語を用い、美や藝術にまつわる様々な事象を言い分けたつもりになっている自分に気付かされる。確かに「ミュージアム」は単にmuseumのカタカナ表記ではなく美術館や博物館とも違う、諸々の事情に満ちた単語なのだった。

今思えば「この景色を映像化したらさぞ格好いいだろうな」だったのではという気もするが、本書の帯にある「『美しい』とは何か？」をあらためて問うきっかけになった。

今年4月に着任して以来、デザイン学部のある大学ならではの良い意味で偏った図書館サイコー！と何度も感動している。一度社会に出るとよく分かるが、こんな場所はなかなかない。学生の頃、もっと図書館に足を運べば良かったと痛感していることを、ひとまず学生の皆さんには伝えておきたいと思う。

特集 わたしの1冊 ～おすすめの本を紹介します～

『たゆたう』 (角川文庫)

長濱ねる [著]
KADOKAWA, 2023
[914.6/N 13]



うまく表現できませんが、この本は、私の中に彩りを与えてくれました。

この本は、樺坂46の元メンバーで女優の長濱ねるさんのエッセイ集です。私は彼女のことをほとんど知らないまま、「きらきらしていて私とは別世界で生きている人」という認識だけで、この本を手に入れました。

この本では、長濱さんの素敵な感性や、私にもある感情、それら全てが言語化されています。大切な人たちとのできごと、何気ない日常、楽しいことだけではなく悩みごとまで、ありのままに丁寧に綴られています。共感できる部分も多く、鳥詩がましいですが、別世界で生きている彼女と近づけた気がしました。長濱さんはご自身の文章が暗く感じると記されています。しかし、私にとっては光のようなエッセイ集でした。

印象的だった部分に付箋をつけながら、本を読み進めました。「おばあ in TOKYO」という、「死ぬまでに歌舞伎が観たい」おばあちゃんを歌舞伎座に連れて行くエピソードから、付箋をつけた2カ所を引用します。

「その言葉を全てこぼさないようにキャッチしながら、その姿を目に焼き付けるのに必死だった。」(p.82)

「『ねるちゃんにいっぱいお金使わせたね。ごめんね。ありがとうね』と声をかけてくれたので、『そのために働いてるんだよ』といつか母が私にかけてくれた言葉をそのまま渡してみた。こんなことを誰かに言う日が来るなんて思ってもいなかったが、なんだか私まで心が満ち足りたような、幸せな気持ちになった。」(p.85)

おばあちゃんから飛んでくる嬉しい言葉たちを自分の中にしまっておく場面と、母からもらった愛の言葉をおばあちゃんに伝える場面です。これだけで、この本の魅力を伝えられるような気がします。長濱さんの優しさが凝縮されたこのエピソードを読んで、私も家族に愛の気持ちを伝えたいくなりました。

疲れたときに読み返したくなるような、そして日々の彩りを与えてくれるようなわたしの1冊です。ぜひ、お手に取ってみてください。

【文化政策学部 文化政策学科 3年 杉浦 美玖】

『海辺のカフカ』は単純明快ではありませんが、私の人生にとって意義のある本でした。私は、村上春樹さんの本をそれまで読んでいたことがありませんでした。理由は、ノーベル賞候補という話題の印象が強く、まだ子供な私には難しいだろうと感じていたからです。一方で、いずれ読まなければならないという漠然とした義務感を感じていました。そして少し大人の気分になった大学1年にやっと読んだのがこの本です。

この話は、二つの世界線が次第に交わっていきます。一方では、家を出して知らない街の図書館で暮らし始めた少年「田村カフカ」は、様々な人物と出会いながら自由や孤独について考えます。そしてある日父親が殺されたことを新聞で知ります。「カラスと呼ばれる少年」の予言のとおり、たびたび自分自身に不可解な出来事が起こります。もう一方では、猫と会話ができる「ナカタ」が迷子の猫を探しています。猫殺しの男を殺した後、トラック運転手の青年の力を借りながら、この世界のねじれに関わる「入り口の石」を探す旅にでます。二つの世界線で捻れた運命に巻き込まれていく彼らは皆、カフカにとっての「なにか」であり無自覚に存在していました。話が展開し関係がぼんやりと見えてきた時、初めからもう一度読みたくなります。

私が強く感じたのは、少年に対する羨ましさです。いかにも普通な私は、絶対に家出はしないし、図書館や森で生活することはありません。喪失や孤独、誰かを求める衝動を感じることもなく、希薄な人生だと自覚しています。それに対しカフカ少年は、高密度な経験を繰り返して生きています。それでも尚強くなりたいと語る少年を、私は羨ましく感じたのです。もっと感情的で能動的な生き方をしたいという私の気持ちを自覚させられました。

大学生は、社会に片足を踏み入れ自分の人生や価値観について考えるようになる頃ですから、この本はみなさんにとっても思慮を巡らすきっかけになると思います。また、読む年齢によっても感じ方が変わる作品だと思います。ぜひ読んでみてください。

【デザイン学部 デザイン学科 2年 松本 翠里】

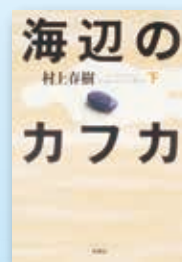
『海辺のカフカ』[上]

村上春樹 [著]
新潮社, 2002
[913.6/Mu 43/1]



『海辺のカフカ』[下]

村上春樹 [著]
新潮社, 2002
[913.6/Mu 43/2]



特集 わたしの1冊 ～おすすめの本を紹介します～

日本は消費するためにつくられたにも関わらず、食べられずに捨てられる食べ物、誰にも着られることがなく捨てられる服が大量に発生しています。本書は、その状況を新聞記者が取材を重ねて明らかにしたものです。

日本で販売される衣類の98%以上を輸入に頼っています。私の研究調査地はバングラデシュです。現地では、ファスト・ファッションの衣類を輸出するために、工場でもとても低い賃金で劣悪な環境のなかで働いている人がいます。2013年には、違法建築の工場が崩壊して多くの女性たちが命を落としました。また、国内では、技能実習生たちが過酷な暮らしのなかで縫製作業を行っています。そんな状況の中、国内では年間約10億点の新品の衣類が捨てられていると推計しています。

食べ物については、日本は多くを輸入に頼っていますが、一人あたり、一日お茶碗1杯分の食べ物が捨てられている状況が発生しています。一方で、世界には、食べ物がなくて栄養不足で苦しむ人が7億人以上います。国連WFPが世界に届ける食料支援の量の約1.2～1.5倍ほどの量の食べ物を日本では毎年捨てているのが現状です。

著者はこれらの問題の原因について、生産の現場から、そして、流通の過程、消費者の意識などから探っていきます。アパレル・メーカーの都合やコンビニの流通や食料に関する慣習、いろんな要因が挙げられていますが、消費者である私たちのニーズに基づくものもあります。

さらに、本書では、大量廃棄を減らすための取り組みも紹介されています。この本が出版されてから多くの反響があったと著者の仲村さんは語っています。その後、改善された慣習や取り組みなどもあります。量は少ないかもしれませんが、ひとりの消費者としてできることはたくさんあります。この本を読むことで、自分の暮らし、消費を見直す良いきっかけになればと、みなさんにお勧めします。

【文化政策学部 国際文化学科 准教授 石坂 貴美】

『大量廃棄社会：アパレルとコンビニの不都合な真実』 (光文社新書)

仲村和代、藤田さつき [著]

光文社, 2019

[519.7/N 37]



『聖母の美術全史： 信仰を育んだイメージ』 (ちくま新書)

宮下規久朗 [著]

筑摩書房, 2021

[081/C44/1578]



聖母マリアというと、みなさんは、幼子イエスを腕に抱く優しげな女性を思い浮かべることでしょう。聖母マリアは世界でもっとも信仰されている女神であり、世界の総人口の約3分の1をしめるキリスト教徒のうち多数派を占めるカトリックやギリシャ正教で崇敬の対象となっています。

ところが意外なことに、聖書には聖母のことはほとんど出てきません。今回推薦する宮下規久朗『聖母の美術全史』は、古代から現代にいたるまでの世界中の聖母の意味とイメージについて広く知ることができる本です。聖母がなぜ世界中で長らく祈りの対象となってきたのか、歴史とともに学んでみませんか。

もともと聖母信仰とは、キリスト教が生まれる以前の各地の地母神が取り込まれていったものでした。そのためキリスト教の枠組みでは捉えることのできない多様な造形で表され、土着の宗教と習合しながら広く浸透していったのです。

14世紀や17世紀に西洋でペストが大流行したときも、聖母信仰は大きく盛り上がりました。宗教改革の後には、非西洋圏への布教に聖母マリアが重要な役割を担いました。この頃キリスト教が伝えられた中南米やアジアでも、聖母像は広く信仰を集め、さかんに作られました。日本の南蛮美術や隠れキリシタンの画像もその一つです。やがて啓蒙主義の時代となり、政教分離が進んでも、民衆の間では聖母の人気は衰えることはありませんでした。20世紀以降も戦争の記念碑や現代アートに母子像となって表され、人々の心の拠り所となってきたのです。

このように、聖母の信仰と美術は古今東西におよび、普遍的な母性を表すものとして、キリスト教という一宗教の枠にとどまらない広がりをもっていました。聖母信仰はつねにイメージと結びついており、聖母と美術とは切り離せない関係にあります。本書は、美術史や宗教学はもちろん、東西の歴史や文化について考える際に豊かなヒントを与えてくれるでしょう。ぜひ手にとってそのおもしろさを味わってみてください。

【文化政策学部 芸術文化学科 講師 藪田 淳子】

『絵を描く喜び：
千住博の美術の授業』
(光文社新書)

千住博 [著]
光文社，2004
[720.7/Se 66]



わたしの一冊という企画でご依頼いただき承諾したものの、困ったことに私はあまり本を読む習慣がありません。今でこそ少しは読むようになりましたが、子供の頃は読書が嫌いでした。苦手ではありません。嫌いでした。体を動かすことや手を動かすことが好きだった私にとって、活字を目で追いかける行為が特にキツかった。それに加え、少年時代の私を振り返ってみると自らの経験に基づかない思考や価値観を受け入れるのが苦手だったようです。しかし、考えることは好きなのです。

そんな厄介な性格の人間が何をきっかけにこの本を手にとったのか、詳細は忘れてしまいましたが、高校生の頃に大学受験の指導をしてくださっていた先生からの勧めでした。大学進学に向けて、さらにその先の人生において当時の私に足りない意識を見抜かれていたのでしょう。ちょうど何か変えなければいけないのではと悩んでいた時期でもありましたので、勧めるタイミングも含めて図られていたようです。

最初は嫌いな読書ということもあり渋々読み始めました。しかし読んでみると、少し専門的なことについて理解できない部分はあったものの、今となっては基本中の基本と言って良いほどの大切な内容が多く自然と読み進めることができ、当時狭かった視野が広がるターニングポイントのひとつになりました。

内容について少し紹介すると、この本の著者は日本画が専門の著名な画家です。デザイン・工芸と分野は違いますが、当時言語化できないながらも求めていたものをひとつずつ確認しているような感覚で、当時の私の思い込みを壊してくれました。アート関連の内容にもかかわらず「個性は今以上なくていい」なんて書いてあるのです。目から鱗とはこのことなのかと実感したほどでした。

繰り返しますが私は読書が好きではありません。そんな私でも時折思い立っては初心を忘れないよう、自分自身を見つめ直すためにこの本を読み返します。全体のページ数も多くはないので、読書に苦手意識がある方でも是非手に取ってみてはいかがでしょうか。

【デザイン学部 デザイン学科 講師 古賀 真弥】

本書は、明治中期から大正初期にかけて活躍した官僚建築家・妻木頼黄（つまき・よりなか、1859–1916）を主人公にした長編歴史小説です。明治は、新しい国民国家を表象する建築が求められ、その表現を巡って試行錯誤が続いた時代です。欧化一辺倒の潮流にあって、和洋の折衷による新たな意匠の可能性を模索したのが妻木でした。

妻木は、中央停車場（現・東京駅）や日本銀行本店本館の設計を手掛けた辰野金吾と、帝国議事堂建設の設計案選定方法を巡って対峙したことで知られます。明治日本を代表する建築家の一人でありながらも、当時の建築界の「主流から微妙に逸れたところにいる人」（※著者刊行記念インタビューより）であった妻木の活躍を追いつつ、読者は帝都東京の、そして日本の近代化の姿をありありと想像することができます。作中ではとくに、広島臨時仮議院や葉煙草専売所の造営といった、困難な国家的建築事業の数々を鎗田作造や小林金平、矢橋賢吉ら多くの部下を率いて実現に導いた鮮やかな手腕が印象的です。

実は私にとって、妻木頼黄は、博士後期課程での研究で扱っていた（そして、現在も向き合い続けている）題材です。本作の『小説すばる』誌上の連載を横目に、自分の研究を進めていました。関連する史資料を少なからず見てきた立場から率直に言えば、著者が提示する妻木頼黄像には首肯しかねる部分がいくつかあります。とりわけ、政治家や官僚との交際を好まない孤高かつ無欲の存在として妻木が捉えられている点は、書名「剛心」の由来でもあるようですが、同時代の記録や証言からはかけ離れています。技術力と構想力を武器に、藩閥政治家や高級官僚、新興の政党勢力らと渡り合った妻木のアクの強さが脱色されてしまったように見えて、個人的に物足りなさを覚える部分です。

そうは言いつつ、「国のこれからの形を見定めた建築物」（※）を目指して奮闘した妻木や彼が手塩にかけた部下たちの熱量には、圧倒されるものがあります。彼らが100年以上前に描いた「社会の風景」とでも言うべきビジョンを、本書は、現代に生きる私たちの眼前に鮮明に投影してくれています。

【デザイン学部 デザイン学科 特任助手 西山 雄大】

『剛心』

木内昇 [著]
集英社，2021
[913.6/K181]



特集 わたしの1冊 ～おすすめの本を紹介します～

実家を出て6年が経ちました。鹿児島島の田舎を離れ、沖縄で観光地のど真ん中に住み、浜松の街中に越してきて、ひとりでたんたんと暮らしてきました。自由で、何してもよくて、誰にも何も言われなくて、楽しく過ごす毎日でも、なぜか疲れてしまったとき、ふと読み返したくなるのが、『大きな森の小さな家』です。

『大きな森の小さな家』は、著者ローラ・インガルス・ワイルダーによる自伝的な児童文学小説です。舞台は1870年代の西部開拓時代、ウィスコンシン州にある大きな森の小さな家で、少女ローラとその家族の物語が描かれます。大きな事件が起こることも、危険な冒険をすることも、感動的に終わることもありません。ゆっくりとした、けれども厳しく激しい日常がただただ流れていきます。秋の食料づくりに始まり、冬は親戚で集まってクリスマスパーティー、春になったら町へお出かけに行き、夏には穀物を取り、麦わらを編みます。そしてまた秋になり食料を貯め冬がやってくる、一年間の四季とともに送るローラ一家のなんてことない自給自足の生活です。現代人が憧れるインスタグラムに投稿されるような「丁寧な暮らし」とは、まさにこのことだと思います。けれども、彼らは自然の恩恵を受けながらも、常に自然の驚異におびやかされて生きていきます。ただ日常が流れていきながら、日常を過ごせることへのありがたさを感じさせられる物語です。

今私はローラの大きな森とはかけ離れた、なんでもすぐに手に入る便利な環境の浜松に住んでいます。そんなところにいるからこそ、厳しくもあたたかいローラの生活に憧れ、何も無い田舎が恋しくなるのかもしれません。

学術書や自己啓発本とは違って、読むべきといわれる本ではないですし、児童文学ですので、対象年齢は小学生だと思います。それでも、今の環境が疲れてしまったとき、どこかで一息つきたくなったとき、この本を手にとってはいかがでしょうか。

【大学院 文化政策研究科 2年 玉城 菜々子】

『大きな森の小さな家』 (福音館文庫)

ローラ・インガルス・ワイルダー [作];
ガース・ウィリアムズ [画];
恩地三保子 [訳]
福音館書店, 2002
[933.7/W 73]



『小さな風景からの学び： さまざまなサービスの表情』

乾久美子, 東京藝術大学乾久美子研究室 [編著]
TOTO 出版, 2014
[520.4/I 59]



普段目にしている風景にはどんなものが映っていますか。7階建てのマンション、同じ顔をして並んでいる一軒家、自転車に乗った登校中の中高生達、ネットにくるまったばんぱんのゴミ袋、舗装された歩道の間から顔を覗かせる雑草。何気なく目に映っているそれらの物それぞれは、よく観ていくと実はおもしろい特徴や背景を持っているのではないのでしょうか。

本著は、そういった何気ない風景の中で「生きられた場所」と感じるものを撮影し、そうと感じさせる風景の根源を探るというようなプロジェクトをまとめたものです。「生きられた場所」とは誰がつくったのか分からず、偶然かもしれないような形や配置の意味や構造のこととされています。私が乾さんを知ったきっかけとしては、2022年に静岡文化芸術大学で行われたワークショップに参加したことでした。内容としては静岡県内の水にまつわる小さな風景を撮影・分析することを実際に行い、乾さんに講評していただくというものでした。このワークショップに参加したことで、それまで気に留めることもなく通り過ぎていた風景を意識してみるようになっていったと思います。それからは普段まちを歩く際に意識が向くところが増え、よりたくさんの発見があり、ものについて考えることが増えたような気がします。

ある風景から感じるニュアンスは人によってさまざまです。そのため写真から感じるものが本著にあるものと読み手のものが異なるかもしれませんが、そういった違いを感じ、新たな発見を得られるでしょう。本著のリサーチのように「なんかいいかも」と感じるものに対してシャッターを押して集めていくことでいいし、撮影はしなくとも注意深く観察し考えることが自分たちの身の回りを見直して良くしていくことに繋がるのではないのでしょうか。これからもいろいろなものを見て、考えていきたいと思います。

【大学院 デザイン研究科 1年 田中 晴己】

■制作者コメント

【デザイン学部 デザイン学科 4年 山本 佐世子】

■図書館・情報センター長コメント

【図書館・情報センター長、教授 かわ こうせい】

